

カンタベリーのアンセルムス—悪の論理と倫理—

山崎 裕子（やまざき ひろこ）

本論文は、カンタベリーのアンセルムス（Anselmus Cantuariensis, 1033-1109）が体系的にではなく複数の著作に著わしている悪の問題を考察し、論じたものである。アンセルムスが悪を捉える際の特性とは何かという問いを立てつつ、いくつかの方向性から彼の発想法や考え方を分析・考察した。

第1章「悪の倫理—なぜ人は過ちを繰り返すのか—」は、一般の方に向けて書かれた論考を修正したものである。悪と罪についてどのように理解することができるのかを倫理的アプローチからまとめ、個人の悪と集団の悪に分けて論じた。悪に関する通常の見え方と比べ、アンセルムスは悪の原因を無知と弱さという分け方をせずに、なすべきこととなすべきではないことという側面から考えている。

この章は、悪についての基本的な理解を得ることを目的とするため、アンセルムスについても述べてはいるが、彼の思想に特化した考察は、第2章から始まる。

第2章『望むべきではないものへの指向』としての「離反」は、悪によって神から離反すること（aversio）をめぐる、アンセルムスがアウグスティヌスの基本的考え方に同意しつつも、どのような発想の転換をしているのかについて考察したものである。アウグスティヌスは悪を「不変な善から意志が離反し可変的善へと指向すること」と定義づけた。それに対してアンセルムスは、アウグスティヌスと同様に、悪の起源が可変的善への指向ではなく不変な善からの離反にあると考えるが、悪について表現するときに、「離反（aversio）」という用語よりもむしろ「指向（conversio）」という言葉を用いる。

アンセルムスにとって、正義以外の対象は、厳密に言えば、望むべきではないことである。そのため、「意志が望むべきではないことを指向すること」は、アウグスティヌスの「不変的な善から意志が離反すること」に該当する。「望むべきではないものへの指向」というアンセルムスの表現は、アウグスティヌスが定義する *aversio* の意味を正確に表わすのである。

第3章「否定の義務—*debere non facere* の意味—」では、「なすべきではない」という否定の形をとる義務について考察される。私たちは通常、「なすべきではない」と言い、「なさないべきである」とは言わない。しかし、アンセルムスは、私たちが「なすべきではない」という表現を用いるとき、実質的には「なさないべきである」が意味されていると言う。

アンセルムスは悪を、(1) なすべきでないことをすること（*facere quod non debet*）、もしくは、(2) なすべきことをしないこと（*non facere quod debet*）として把握する。*Debet* は助動詞で、(1) の *quod non debet* と (2) の *quod debet* には動詞が含まれない。もし不

定形 *facere* が *quod non debet* に付け加えられるならば、*quod non debet facere* (なすべきではないこと) と *quod debet non facere* (なさないべきであること) となる可能性がある。一般的に、「なすべきでない」という文章は義務を連想させる。しかしアンセルムスは、それを、必ずしも義務ではないと見なす。すなわち、「*non debere* + 不定形」は必ずしも義務を意味するわけではないが、「*debere non* + 不定形」は、必ず義務となるのである。

アンセルムスは言葉の本来の使い方と非本来の使い方を考える。「なさないべきである」と表現するのは *debere* の本来の使い方であり、「なすべきでない」と表現するのは *debere* の通常の使い方、すなわち、非本来の使い方である。しかし、使い方が本来のであるか非本来のであるかにかかわらず、もし義務が果たされないのであれば、それは悪であることに違いはない。アンセルムスは、「どのような罪が犯されるのであれ、それらはすべて神に対する罪である」と言明する。*Debere* と *debere non facere* を強調するアンセルムスの悪の理解の仕方は、神からの強い引きつけに根ざしている。

第4章「アンセルムスの自由論—*proprie* と *improprie*—」は、なぜアンセルムスが「意に反して望むこと」を否定するのかを問う。本質的には、「意に反して望むこと」は不可能である。「ある人の意志に反して (*invitus*)」は、「望まずに」を意味するからである。アンセルムスは *invitus* の本来の使い方 (*proprie*) と非本来の使い方 (*improprie*) を示すことによって、なぜ「意に反して望むこと」が成り立ち得るのかを説明する。とはいえ、意志の正しさを捨てるという点で、意志の正しさがそのもの自体のために放棄されても (*proprie*)、他の何かのために放棄されても (*improprie*)、正しさを放棄することに違いはない。

アンセルムスが「意に反して望むこと」を否定するのは、彼の自由論の中心概念である「意志の正しさ」の放棄を避けるためである。「意に反して選択すること」が受け入れられると、それ自体のために保持される意志の正しさ、すなわち正義が保持されなくなるので、「意志のゆがんだ指向 (*prava voluntatis conversio*)」が残り、自由の基軸が失われるのである。

第5章「秩序の美しさ」においては、アンセルムスが秩序と悪について通常の間違った考え方とどのように異なる発想をしているのかを考察した。秩序と悪に関する一般的な考え方では、行為者 (能動者) の意識が主として問われ、受け手がこうむる悪については言及されてこなかった。しかし、行為を受ける者にとっては、それが行為者にとって罪であるか (原因としてのひずみ *perversitas* = 本来の意味での罪)、それとも悪であるかに違いはない。たとえ罪ではなく悪であっても、結果として悪が生ずる場合、受け手にとって現実としては同じ重さを持つからである。アンセルムスは、神の栄誉と秩序の美しさという考え方を展開することにより、受動者にも目配りしていると言える。

ゆえに、行為者がその行為を意識していてもいなくても、結果として悪が生ずるのであれば、それは結果としての *perversitas* (ひずみ) が生じていることになる。そのことは、非本来の意味での罪を意味し、秩序を乱し神の栄誉を損なうことになる。

第 6 章「原罪と悪」では、アンセルムスの原罪論の特性について、ペトルス・アベラルドゥス（1079－1142）の考えと比較しつつ、考察される。アンセルムスは「すべての罪は不義であり、原罪は絶対的な意味で罪である」と語り、同意してはならないときに欲望に同意することが罪であるとも言う。しかし、原罪は私たちが犯す罪ではなくアダムとエバによる行為の結果として伝えられ、それには同意が伴わない。罪が伝わることと罪を犯すことは、本質的に両立しないことである。

アンセルムスによれば、原罪は「あるべき原初の正義の欠如」である。原初の正義は神から与えられ、もしそれを放棄するならば、神の栄誉が損なわれる。アンセルムスにとって、神の栄誉こそが罪を犯しているかどうかの基準となるのである。神の栄誉を損なうという観点には、原罪と自罪の区別は生じない。それゆえ、アンセルムスが原罪について表現する際に、神の栄誉という言葉を用いずに「原初の正義の欠如」としたのは、原罪と自罪との違いを明確にするためであると考えられ得る。

アベラルドゥスの場合、同意しているか否かが罪を犯しているか否かの判断基準となる。ゆえに、原罪は同意を伴わないので、罪ではなく罰として説明されることになる。

第 7 章「平和を作り悪を創造する神」においては、神が「平和をもたらし悪を創造する」とアンセルムスが語る意味が問われる。神が悪を創造することは矛盾とも思えるが、この表現自体は旧約聖書のイザヤ書に由来する。アンセルムスは、神によって創造される悪を、神による何ものか（aliquid）であると見なしている。彼は、「何ものか」の意味を分析しており、それが神によって創造される悪にどのように適用され理解可能であるのかを考察したのが、この章である。アンセルムスは、「罪を犯す」もしくは「悪を行う」と言う代わりに、「愛の規範をはずれる」と表現する。「愛の規範」に適っていない場合に「何ものか」としての悪が創造され、そのことが罪を是正する悪を意味し、平和へとつながる。

第 8 章「カンタベリーのアンセルムスとトゥルネーのオド」では、神が「平和をもたらし悪を創造する」ことについて、アンセルムスとオド（c. 1060－1113）の考えを比較した。オドは、悪について、アンセルムスと類似した表現をしているが、両者の考えは、無の受け止め方について、同じではない。オドの研究は数少なく、両者の比較は、国内外を通じて初めてのものである。

第 9 章「アンセルムスの祈り―祈りと罪意識の構造―」では、まず、「聖母マリアへの祈り」における校訂版（シュミット版）の初版と第 2 版の違いに着目し、写本をも含めた比較を行った。次いで、それを糸口として、罪びとであるという強い意識をアンセルムスが有し、そのことが祈りに構造的に表れていることを考察した。

アンセルムスは「聖母マリアへの祈り」において、イエスへの取次ぎをマリアに祈るのではなく、マリアを愛することができるようにとイエスに取次ぎを願う。それは、罪びとである自分が他者のために祈るに値するのだろうか、という迷いをアンセルムスが持っているためである。よって、祈りは通常の「祈る人→マリア→イエス（神）」という構図ではなく、「アンセルムス→神の子イエス→イエスの母マリア→イエス・キリスト」となる。そ

して、自分は罪びとであるという強い意識から、祈りが成就された後に再び、本当にマリアを愛することができるだろうかと疑問が生じ、祈りの円環構造となるのである。

第 10 章「愛（カリタス）の理解」では、愛が損なわれると罪になるという観点から、アンセルムスが愛についてどのように理解しているのかを考察した。カリタスの 3 つの意味（1. 神から人への愛、2. 人から神への愛、3. 人間同士の愛）のうち、アンセルムスは通常、人間同士の愛の意味でディレクティオを用いる。彼が「愛の泉」を“*fons caritatis*”ではなく“*fons dilectionis*”と表現するのは、人間同士の愛（*dilectio*）の根源としての「神の愛（*caritas*）」を考えているからである。カリタスとディレクティオを使い分けるのは、アンセルムスがみずからの罪と神の恵みに対する強い意識を有することに起因する。

結論としてまとめると、アンセルムスは、アウグスティヌスの悪に関する見方を基本的に受け継いでいるが、発想の転換をしている。悪についてのアウグスティヌスの基本メロディーに対して、アンセルムスは 7 つの変奏を奏でたと言い表すことができよう。それらは、第 1 章から第 7 章における分析と検討に該当する。拙論では、それらに加えて、悪とのつながりという観点から、罪の意識と祈り、そして愛についても分析と考察を深め、12 世紀の思想との比較も行った。

神が善である限り、人間の悪しき行為は神の栄誉を損ねることになる。それゆえ、本来の秩序づけを保つために、神によって「何ものかとしての悪」がもたらされる。この考え方によれば、神による被造物の創造は神による第一の「無からの創造」、そして、神による何ものかとしての悪の創造は神による第二の「無からの創造」と言うことができるかもしれない。創造という行為は、神にのみ可能である。神による第二の「無からの創造」は、不正によって無となった状態から、人が再び元の状態に戻る可能性をもたらす。

アンセルムスの倫理思想は、論理と密接に関連している。悪は人間の行動の機微にかかわるものであるにもかかわらず、論理にも裏打ちされている点に、アンセルムスの悪についての捉え方の特徴があると言えるであろう。「悪の論理と倫理」という副題を付けたのは、そのためである。